
ヴラッド.

械人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴラッド.

【Nコード】

N8650X

【作者名】

械人

【あらすじ】

世界は終わり、「械物」と呼ばれる生命体が統べる時代。生き残った人類は世界各地で死闘を繰り広げていた。

圧倒的な戦力の前に次々と数を減らしていく人類。希望も持てず、死にゆくもので溢れかえった。

その反面、械物は日に日に突出したテクノロジーを見せつける。

進化の為に生まれたものの進化を止めることは出来なかった。

広がる戦力差。

狭まる生存率。

紅い空の下で、人類はもがき続ける。

プロローグ 終焉の砂漠で。(前書き)

あ、ども。「械人」と名乗らせてもらっています。こんな小説でも
ご閲覧頂ければ幸いです。一応、SFですが、しばらくの間、話が
見えないかと思いますが、最後まで読んでもらえたら、嬉しいです。
これから、ちまちま投稿するつもりです。

では、お楽しみ下さい。

プロローグ 終焉の砂漠で。

紅い。

紅い、紅い空。

昔のように鷹は飛んでいなかった。

空なんか見上げたって、虚しい思いをするだけだ。

そう、自分に言い聞かせ、不意に立ち上がった。すこしよろけたが、がっしりと地面の砂が足を助けてくれた。

砂漠のど真ん中。

もろに受ける日光を、手なるべく防ぎつつ歩いた。熱い、それと背中に背負っているライフルが重たい。苦に苦が重なって行く。

だが、そんな中でも、警戒は怠らなかった。なぜなら、いつ「敵」が来てもおかしくないからだ。

ぎよろぎよろと周りを見渡し、常に態勢を整えておく。いつまで、保てるかはわからないが、己の精神力の限り警戒態勢をしいた。

目的はただ一つ。この忌まわしい砂漠を抜けることだ。なぜなら、いつ命を落としても、ここではおかしくないからだ。そこらにうごめく、邪悪な化け物どもの気配をいつでも感じている。

ふと、体にピリツと来るものがあった。

おもむろに右腕を引っ掻く。だが、なにか異物がついていている気がして、袖を引き上げた。

「くそっ……しまった」

小汚い虫が付着していた。

さっ、と手で払い、着地したところを足で踏みつけた。

だが、もう遅かった。この虫に血を吸われたあとは、必ずと言っていいほど化け物どもが襲いかかって来る。きつと、血の匂いを嗅ぎつけて来るのだろう。

すると突然、閃光のように殺気がほとばしった。

まるで弾かれたかのように走り出す。

恐怖と緊張に追われる。口から息が漏れる。

死にたくない。

いままで何度か死闘を繰り返したが、どれも戦わず逃げに逃げて捲くことしかできなかった。あいつらから見れば、自分なんてアリ同然だ。強さも、そして大きさも。

息が詰まり、苦しくなっても走り続けた。

死ぬよりましだ。

恐怖が駆り立てる。

敵の姿は見えないが、気配をビリビリと感じている。皮膚を伝い、感覚神経を渡り、脳が危険信号を出す。

死にたくない。死にたくない。・・・・・。

いきなり、何かに足を掬われた。

ざつと前に倒れこむ。口いっぱいに砂が入り込んだ。

砂も息も吐き出し、すぐさま態勢を立て直す。

だが突然、

ドオオオオオオオオオン！

と巻き上げる砂塵に、一瞬のうちに飲み込まれた。

空中で服が絡み合う。身動きがとれない。砂塵の圧倒的な圧力に、なす術も無かった。

ドン、と重圧な音とともに、落下する。全身に激痛が走った。

体はすでに鉛のごとく重く、動くことは出来なかった。そこらじゅうから、流血している。

痛い。

あまりの痛みに頭が真っ白になっていく。

だが、朦朧とする意識の中、巻き上げる砂の中から現れる、あいつが見えた。

柱のように、太い牙。全身を覆う剛毛。目玉の無い顔面。ゆうに五メートルは超える全長。まさに、化け物と呼ぶにふさわしい。

すーっと体から流れ落ちる砂が自分にかかる。

すでに恐怖の存在は消えた。きつと、ここで死ぬからだ。

万事休す。終わった。

さあ、やれよ。

食えよ。

はやくしろ。

楽にしてくれ。

はやく。

やれ

暗闇にとらわれた。

アム。

———っおい、聞こえるか——
クッソー電気ショックだ———

バン！

胸が弾けた。

「はあっ！！がつ……！ぐほっ……！」

光を感じた。誰かいる。

「目をさましたぞ！おい。見えるか。俺がみえるか？」

返事が出来ない。

誰だ？

視界に流れる誰かの顔。それはまだ、はつきりしない。

ここはどこだ？

仰向けの態勢のまま、音だけがかすれて聞こえた。

パァン！

突然、頬を張られた感覚。じんわりと痛みが続く。だが、その痛みが覚醒を促した。

次第に映像がはつきりしだした。

「見えるか！おい、返事しろ」

ふっと、男の顔が入って来た。爽やかな顔立ちをしている。ロシア系の顔だろうか。

しばらくのうちに、口の周りの筋肉の緊張が解けていった。今なら声を発せる気がした。

「だ……れ……」

言葉を絞り出した。

「よし、大丈夫だ」

男は安堵の笑みを浮かべる。

返事を返せた。とっさに起き上がろうとしたが、動けないことに

気づいた。まるで、頭だけ体から独立しているような感覚だ。

「そのままじっとしている。動くな」

そう言われたが、動こうにも動けない。というより感覚が無い。まるで、顔から下が浮いているようだ。

ああ、死ぬのかな。

どうやら、助けられたようだが、なんとなく助からない気がした。だが、自分は一度食われたはず。辛うじてだが、生きていることに疑問が浮かんた。何故、あんな砂漠に救援などきたのか。

あまりに都合が良すぎる。

周りの状況を把握しないまま、時間が過ぎた。

運び出されて初めて、搬送車の中だったことを知った。首を曲げて確認すると、数人の男に運ばれている。ぱっと見、それぞれ出身地が違うような顔立ちだった。

これから一体、どこへ向かうんだ。

「ぼうず。」

さっきの男が突然喋りかけた。

「口がおぼつかないなら、返事はいいが。とにかく、心配しなくていいからな。」

うん、と返事を返そうと試みたが、かすれて声にならなかった。心配しなくていい、か。

ふと、辺りを確認してみた。首を真後ろに反らす。すると、目に入り込んできたのは、軍の基地ともとれるような巨大な施設だった。行き先はそこへと向かっている。

正面玄関のようなものは無く、シャッターの下からくぐり込む。何処へ向かおうとしているんだ？

さらに奥へと行くと、長い廊下に出た。凄まじい人の量だ。

まるで、一万単位のライブ会場のようだ。そのなかでも、様々な人種が集まっているようだ。天井の証明がちかちかとリズムに乗せ

て通り過ぎる。

一体何処なんだ。ここは。

いつのまにか、男が注射器を握っていた。

「少し眠っていてくれ。すぐ、目覚める」

抵抗も出来ずに、針を右腕に挿入された。少しも経たないうちに、すーっと力が失われていった。

まぶたが降りてくる。

言い知れぬ睡魔に襲われた。

あがく余地すら無いままに、暗い場所へと墜ちた。

— — — — —
— — — — —
— 正常 — — — — —
— — — — —
— — — — —
— 一体は — — — — —
— — — — —
— — — — —
— 異常 — — — — —
— — — — —
— — — — —
— ありません — — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

聞こえる。

おどけたような声が。

本当に異常は無いのか。

ええ。極めて正常で。

ありえん．．．．．。化け物の腹の中でいて、死に絶えなかったと？

はい。報告は間違っていないません。

奴の体内は高濃度の放射能が充満しているのだ。いくら、瀕死で

あっても、ここまで体が持つはずがない。

・・・・・・・・・・・・・・・・

その上、化学反応まで起こしているのだ。心拍の動作は二倍。呼吸器系となると、二・八倍だ。到底生物の追いつける、生命活動ではない・・・・・・・・。

ですが、彼は生物とはかけ離れた物と接触しています。それも体内まで。

・・・・・・・・・・・・・・・・。ドラグノフ大佐は自己の資産を投じて、彼を再起可能にすることを決定した・・・・・・・・。

まさか！あれをすることも。

ああ。

人外です、あまりにも！

大佐の決定だ・・・・・・・・。一大戦力となるとふんでいる。

そんな・・・・・・・・。こん————いいんですか————
——きつと——————

光が入り込む。

自然にまぶたが開いた。

気づくとベッドの上に居た。体が羽の様に軽い。ぱつとシーツを押しのけ、起き上がる。辺りを見渡してみた。

左腕の点滴以外、特に気にもならない病室の風景だった。

男の姿も見当たらない。困惑する頭を抱え、足をじたばたさせてみた。

嘘みたいだった。

さつきまで、死を予感していたはずが、今は極めて正常な体を取り戻している。考えを詰め込み過ぎて、軽くパニックを起こしそうだった。

ガラッ。

突然、戸が開いた。

「元気そうだな」

あっ、と声が出た。あの時の男だった。男はよくみると、軍服をしている。

「名前が聞きたいんだ。覚えてるなら教えてくれないか。」

につ、と歯を見せて尋ねた。勿論、名前くらい分かる。そして、

「アム。アム・ルートマンです。」

そう名乗った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8650x/>

ヴラッド.

2011年11月16日19時50分発行